



日本語の謎・言語の謎

町田 健(名古屋大学文学研究科)



1. 言語が表すもの

- 言語は「意味」を表す。

- 意味 = 事態 (事柄)

- 事態の構造

事態基 [主体、対象、受容者、場所...]

<時区間、全体性、可能性>



2. 事態を構成する要素(1)

- **事態基(事柄の枠組み)**

(主体と対象の間関係:切る、作る、見る)

(主体と事物の集合の間関係:学生だ、大きい)

- **事態基の中での事物の働き＝意味役割**

主体、対象、受容者、場所、道具、起点、着点etc.



3. 事態を構成する要素(2)

事態全体の性質

時区間: 事態が成立する時間的な区間

全体性: 事態の全部または部分の成立

成立可能性: 事態の成立が真である程度



4. 言語の類型

- **孤立語**: 中国語(特に古代中国語＝漢文)、タイ語、ベトナム語、チベット語
- **膠着語**: 日本語、朝鮮語、満州語、トルコ語
- **屈折語**: 古典ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語、ロシア語



5. 類型を決める特徴(1)

主体と対象の表し方

- 孤立語

主体と対象を表す特別の単語がない。

→語順によって主体と対象を表す。

- 屈折語

主体と対象(受容者、道具など)を語形変化によって表す。



6. 類型を決める特徴(2)

- 膠着語

主体と対象を表す特別の単語がある。

日本語の「が」と「を」

朝鮮・韓国語のga,i と(u)rur



7. 類型と語順の関連性

- **孤立語**: SVO、助動詞＋動詞、前置詞＋名詞
- **膠着語**: SOV、動詞＋助動詞、名詞＋後置詞(助詞)
- **屈折語**: SOV、助動詞＋動詞、前置詞＋名詞



8. 語順を支配する原理

発信者の側で事態が作りだされ、受信者の側で事態が理解される過程での効率性を最大にするように、単語が並べられる。

効率性：文を作る単語の列のなるべく早い段階で、事態の内容が限定される。



9. 効率的な語順(1)

主語(主体を表す単語)を文頭に置く

- 主語: 述語を決める事物を表す
- →文を作り出す過程では、主語が決まることで、述語も同時に決まる。
- →文を理解する過程では、文脈(状況)をもとにして、述語の範囲を限定することができる。



10. 膠着語での効率的な語順

- **名詞＋助詞**

名詞の個数は、固有名詞も含めれば十万以上。助詞の個数は高々十数個程度。

名詞を先に置くことで、事態の内容が大きく限定される。

- **動詞＋助動詞**

動詞の個数は、助動詞の個数よりはるかに大きい。



11. 日本語の全体的特徴

- 類型：膠着語
- 語順：SOV、動詞＋助動詞、名詞＋助詞
(膠着語の典型＋効率的な語順)



12. 日本語の特徴－動詞

- ・動詞の後にいくつもの単語が並ぶ→動詞群。

動詞＋使役・受動辞＋アスペクト辞＋時制辞＋モ
ダリティ辞＋時制辞＋否定辞＋終助詞

食べ＋させ＋られ＋てい＋た＋ようじゃ＋なかつ＋た
ね



13. 日本語の特徴－動詞群

- 動詞群は文末に置かれる

主語は名詞で表されること、名詞の個数が動詞の個数の十倍程度であることから、膠着語では、名詞が動詞に先行する語順が最も効率的。



14. 日本語の特徴－主題

- **主題**：副助詞「は」が続く名詞。
状況（文脈）に含まれる事物の全体を表す。
＋後続する部分の性質を支配する。

花子が学生だ。（花子＝主語、排他性あり）

花子は学生だ。（花子＝主題、排他性なし）

- **主題は文頭に置かれる。**



15. 日本語の特徴－冠詞なし

- **冠詞がない**：名詞が表す事物が同じ種類の事物の集合の中で、他の事物と区別される際だった特徴（定性）をもつかどうかを表す単語が冠詞。
 - 文脈・状況によって事物の定性は分かる。
 - 花**が咲いていた。（不定）
 - 花**は咲いているよ。（主題、定）
 - 通りで**警官**に呼びかけられた。
（場面不明、不定）
 - 教壇**の上に来なさい。（場面あり、定）。



16. 日本語の特徴

－関係代名詞なし

関係節（形容詞節、連体修飾節）

名詞を修飾する文

関係節は名詞に先行する

関係代名詞がないと、関係節と名詞の間には、何らかの
関係があればよい。

誰かがピアノを弾く音

クマが歩いた跡

猫に引っ搔かれた傷

ヤクルトが勝った翌日



17. 日本語の特徴－語形成

複合語を作る単語の間にある意味的關係が
比較的自由→複合語の多用

雨降り(主体)、髪染め(対象)、駅売り(場
所)、東京行き(着点)、フランス帰り(起点)

タコ焼き(タコが入っている)、名古屋打ち
(名古屋で始まった打ち方)



18. 世界の言語

- 世界で使われる言語は七千ほど。
- 人類の起源が一つなら、言語の起源も一つ。
- 起源が同じであることが、学問的に証明できる諸言語＝語族

インド・ヨーロッパ語族、ウラル語族、ドラビダ語族、セム語族、オーストロネシア語族など



19. いろいろな語族

- インド・ヨーロッパ語族
- アフロ・アジア(セム・ハム)語族: エジプト語、ベルベル諸語、チャド諸語、アラビア語、エチオピア語
- フィン・ウゴル語族: フィンランド語、ハンガリー語、エストニア語、ラップ語
- チュルク語族: トルコ語、アゼルバイジャン語、タタール語、チュバシ語
- モンゴル語族: モンゴル語(ハルハ語)、チャハル語、オルドス語、ブリヤート語
- ツングース語族: 満州語、ソロン語、エベンキ語、ウデヘ語、オロチ語
- シナ・チベット語族: 中国語、タイ語、ラオス語、チベット語、ビルマ語
- オーストロ・アジア語族: ベトナム語、カンボジア語(クメール語)、モン語
- オーストロネシア語族: マレー語、インドネシア語、タガログ語、台湾先住民諸語、フィジー語、サモア語、トラック語、ハワイ語、マオリ語、タヒチ語
- ドラビダ語族: タミル語、マラヤーラム語、カンナダ語、テルグ語
- ニジェール・コルドファン語族: メンデ語、フラ語、ウォロフ語、ドゴン語、ヨルバ語、
- ナイル・サハラ語族: ソンガイ語、マバ語(チャド)、フル語(スーダン)、クナマ語(エチオピア)
- コイサン語族: ブッシュマン諸語、ホットtentott諸語(アフリカ南部)
- エスキモー・アレウト語族: エスキモー語、アレウト語
- ナデネ大語族: トリンギット語、ナバホ語、アパッチ語、ヒカリヤ語



20. インド・ヨーロッパ語族

- **インド語派**: ベーダ語、サンスクリット語、ヒンディー語(インド)、ウルドゥー語(パキスタン)、マラーティー語、ベンガル語、パハール語、シンハラ語(スリランカ)、ロマ語(ジプシー)
- **イラン語派**: アベスタ語、古代ペルシア語、パフラビー語(中期ペルシア語)、パルティア語、ソグド語、サカ語、コレズム語、ペルシア語、パシュトー語、バルーチー語、オセツ語(カフカス)、クルド語
- **ギリシア語派**: 線文字B(クレタ島)、アッティカ方言、ドーリス方言、アルカディア方言、コイネー
- **イタリック語派**: ラテン・ファリスク語群、オスク・ウンブリア語群、ベネト語(ポー川北部)
- ラテン語→ロマンス諸語(イタリア語、サルジニア語、スペイン語、ポルトガル語、ガリシア語、カタロニア語、フランス語、ルーマニア語、レト・ロマン語、ダルマチア語)
- **ケルト語派**: アイルランド語、ウェールズ語、ブルトン語
- **ゲルマン語派**: ゴート語、北ゲルマン語(アイスランド語、スウェーデン語、ノルウェー語、デンマーク語)、西ゲルマン語(英語、ドイツ語、オランダ語、フリジア語)
- **スラブ語派**: 南スラブ語(古代教会スラブ語(古ブルガリア語)、セルビア・クロアチア語、スロベニア語、マケドニア語)、西スラブ語(ポーランド語、チェコ語、スロバキア語、ソルブ語)、東スラブ語(ロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語)
- **バルト語派**: リトアニア語、ラトビア語、古プロシア語
- **アルメニア語派**
- **アルバニア語派**
- **トカラ語派**
- **ヒッタイト語派**: ヒッタイト語、パラー語、ルウィー語、リュディア語、リュキア語、フリュギア語

21. インド・ヨーロッパ語族の対応関係

「父」「3」「イヌ」「知る」「ある」

古代インド語	ギリシア語	ラテン語	ドイツ語	英語
pitar	pate:r	pater	Vater	father
trayah	treis	tres	drei	three
s'va	kuo:n	canis	Hund	hound
janami	gignosko:	gnosco	kennen	know
asti	esti	est	ist	is



22. 同系の証明

同系＝同一の語族に属していること

複数の言語が同系であることを証明するのは、現在のところ規則的な「音韻対応」のみ。

Skr.	Gr.	Lat.	Goth.	Eng.
p	p	p	f	f
t	t	t	th	th



23. ロマンズ諸語

「父」「3」「イヌ」「知る」「ある」

ラテン語 フランス語 イタリア語 スペイン語 ルーマニア語

pater	père	padre	padre	tata
tres	trois	tre	tres	trei
canem	chien	cane	perro	câine
sapere	savoir	sapere	saber	cunoaște
est	est	è	es	este

ロマンス諸語は、ラテン語から1500年くらい前に分化した。



24. 日本語は何語族？

日本語は、どの語族に属するか分からない。

日本語の単語と、意味と語形が似た単語をもつ言語は知られていない。

南方起源説、北方起源説、混合言語説

アイヌ語、朝鮮・韓国語、バスク語も語族不明の言語



25. でも日本語は仲間が多い

- **膠着語**：単語の後ろに、文法的な働きを表す単語をいくつも並べることができる。

話す＋かける＋られる＋た＋らしい＋ね
＝話しかけられたらしいね

- 朝鮮・韓国語、満州語、トルコ語、ツングース語、スワヒリ語、チベット語

26. 日本語以外の諸言語の分類

- **孤立語**: 文法的な働きを表す単語はあまり使用しない。
 - 主語と目的語は語順で区別する。
 - 中国語、タイ語、ベトナム語
- **屈折語**: 名詞や動詞が活用し、活用形によって文法的な働きが表される。
 - 古典ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語、ロシア語、チェコ語



27. 英語とはどんな言語なのか

- ・系統的にはインド・ヨーロッパ語族だが、類型的には孤立語に近い。
- ・母音も子音も日本語より多く、単語の中ではアクセントのある母音以外は曖昧に発音される傾向。Impossibility, unbelievable
→日本人には発音が難しい。
- ・不規則動詞や不規則名詞(mouseとmice, childとchildren)が多い。



28. 英語の不思議なところ(1)

- ・疑問文と否定文にはなぜかdoが出てくる。

John fell in love with her.

→Did John fall in love with her?

John didn't fall in love with her.

- ・不定冠詞の複数形がない。

I saw the girls.

There are girls in the hall.

フランス語: J'ai vu les filles.

Il y a des filles dans cette salle.



29. 英語の不思議なところ(2)

- ・前置詞なのに後ろに名詞がない場合がある。

I see the house she lives **in**.

This is the book I've been looking **for**.

- ・事柄の可能性を表す助動詞がやたらに多い。

will, would, can, could, may, might
must , should, ought to



30. 英語の不思議なところ(3)

- ・フランス語からの外来語が多すぎる。
river(川)、mountain(山)、flower(花)、
people(人々)、power(力)、arrive(着く)
beef(牛肉)、pork(豚肉)、mutton(羊肉)
- ・15世紀に大きな発音の変化(大母音推移)を起こした→綴りと発音が一致しない。
name(a:→ei), feel(e:→i), time(i:→ai),
home(o:→ou), fool(o:→u), now(u:→au)



31. 英語は変化の速度が大きい

千年前の英語は、今とずいぶん違う。

On siex dagum wæron geworhte
heofanas and eorðe, sunne and
mona, sæ and fiscas.

(In six days were made heavens and
earth, sun and moon, sea and fishes)

(6日間で、天、地、太陽、月、海、魚が作られた)



32. 八世紀の日本語でも分かる！

父母が頭かきなで幸(さ)くあれて言ひしけと
ばぜわすれかねつる

(『万葉集』卷二十、防人歌)

東(ひむかし)の 野にかぎろひの 立つ見えて
かへり見すれば 月かたぶきぬ

(『万葉集』卷一、柿本人麻呂)



33. 日本語も少しは変わった

- **ハ行の音**
- 奈良時代以前 $pa(\text{パ})pi(\text{ピ})pu(\text{プ})pe$
 $(\text{ペ})po(\text{ポ})$
- 奈良時代—平安時代前期 $\Phi a(\text{ファ})\Phi i$
 $(\text{フィ})\Phi u(\text{ふ})\Phi e(\text{フェ})\Phi o(\text{フォ})$
- 平安時代後期—現代 $ha(\text{ハ})hi(\text{ヒ})\Phi u$
 $(\text{フ})he(\text{ヘ})ho(\text{ホ})$



34. 文法も変わった

- 平安時代

「たり」「つ」「ぬ」= 現在完了を表す助動詞

「き」= 過去を表す助動詞

現代

現在完了と過去の区別がない。たり > た

- 「めり」「まじ」「らむ」のような、さまざまな文法的働きをする助動詞が昔の日本語にはあったのが、今ではなくなってしまっている。